

遺伝子結合実験に真剣

県内外高校生
愛媛大で体験

高校生が本格的な研究施設で実験や講義を体験する「ウインター・サイエンスキャンプDX」（科学技術振興機構主催）が25日、松山市文京町の愛媛大無細胞生命科学工学研究センターで始まった。

科学技術への関心を高めようと1995年、公的研究機関を会場にスタート。2003年からは大学や企業でも開かれている。今年は4日間の日程で、兵庫や宮城など県内外の高校1〜3年24人が参加。生命活動に重要

な役割を果たすタンパク質と遺伝子の関係を学ぶ。

キャンピングでは、08年のノーベル化学賞受賞で話題を呼んだクラゲ



タンパク質と遺伝子の関係や実験方法について林教授（左）から説明を受ける高校生

の緑色蛍光タンパク質を活用し、大腸菌にクラゲのタンパク質を作らせるといった実験に取り進む予定。最初の実験では、林秀則同センター教授(59)の手ほどきで、大腸菌から抽出したDNAにクラゲの蛍光タンパク質の遺伝子を結合させた。

参加者は4人一組で6チームを編成。同大理学部学生の助言も受け、真剣に取り組んだ。東京学芸大付属高3年扇山魁斗君(18)は「丁寧に実験をやり、しっかり学びたい」と話した。最終日の28日に、4日間の実験結果を発表する。（渡部聡司）